

- 1996 韓国仏教文化論、『東アジア社会と仏教文化』、高崎直道・木村清孝編、春秋社
- 1997 『法界図記』のテキスト再考：「因陀羅尼」の表記について、『東方』13(韓国語 [1997] 『仏教春秋』、仏教春秋社)
- 1999 内藤湖南先生の真蹟：高麗太祖顯陵詩について、118回『日文研フォーラム報告書』日本国際文化研究センター

常円寺での講演

* この文章は故金知見先生が2000年7月15日、居所だった新宿常円寺のお施餓鬼会の時成された講演を書き留めたものである。

本日由緒ある常円寺のお施餓鬼の場を利用して諸先生のお目にかかるようになったことはわたくしにとっては大変光栄なことだと思っております。まず餓鬼のことから申しますと、とても広くて深い世界観を持っている仏教には、三悪道という世界がございまして、その中に餓鬼という世界がございませう。実は餓鬼という言葉をやたくしどもは日常生活の中でよく使っています。たとえば、お子さんたちが遊んでる時「あのがき」とか、よくものをたべている時「あのがき」とか、そういう言葉をよく使いますね。その時の「がき」というのがまさに餓鬼道の餓鬼でございませう。この餓鬼道という世界に住んでいるものたちは非常に欲張りでも何でも自分だけ食べたいってような気持ちをもってはいるんですけども、なかなか供養してくれないので、食べさせてくれないので非常にお腹が空いている上、苦しんでいるわけがございませう。わたくしどもは日常生活をしているうち、人間同士のことは大事にしながらも人間以外のものはあまり大事にしないで愚かにすることがございませうが、仏様はその餓鬼道で苦しんでいるものたちのためにお施餓鬼という方便を続きまして供養するんでございませう。

そういえば、この常円寺の向かい側に新宿警察署というところがあるんですけど、あちらに「差し伸べる手の温もり」ということがかけてありました。やっぱりいいことを言っているんだなって感じがございませう。普通、温もりの手を差し伸べるとか、差し伸べる手の温もりとかは人間同士でいうんですけども、その餓鬼道までもお釈迦様の教えは温もりの手を差し伸べておられますので、普通の慈悲じゃなくて大慈悲ともいえるんでしょ。

ところで、餓鬼道で苦労している、苦しんでいるものたちは、わたくしども

と全然縁のないものたちではございません。むしろ、わたくしたちの友達であったり、祖先であったり、兄弟であった人たちでございませぬ。その人たちがこの世に住んでいる時あまりいいことをしなかつたので餓鬼道に落ちたのでございませぬ。お施餓鬼は常円寺さまからその餓鬼道のものたちに布施を施す記念日になっておりますので、目には見えないけれどもその餓鬼道で苦しんでいるものたちは多分今日を待ち焦がれていたんだらうと思ひます。

朝鮮半島・中国・日本におきまして、特に漢字文化圏におきましてはいろいろな餓鬼の絵巻や伝説があるし、信仰の一つの形であるお盆の中にもお施餓鬼というものがありますので、今日はとても意味の深い日でございます。ですから、このように常円寺の本堂でお施餓鬼の講演をすることはわたくしどもに大変素晴らしいことだと思ひます。

続きまして、お施餓鬼とも関係のある六波羅蜜について申します。大乘仏教の大事な徳目の中に六波羅蜜というのがございませぬけれども、ご存じの通り六波羅蜜とは布施・持戒・忍辱・精進・禪定・般若の六つをいひます。その六波羅蜜の中でも布施が第一番目の徳目となっておりますが、わたくしどもは布施って言うとき非常に大きいことだと思ひて「いや、俺の生活も困っているのに」っていうことになります。お釈迦様は大乘仏教を教える中で何よりも大事なものを布施とおっしゃっておりますが、布施という言葉はあまりぴったり胸そこに溶け込んでこないもので、わたくしが東京にいた頃、布施のことをなれない日本語でありながら現代人のわかるような言葉で訳させていただいたことがございませぬ。「あなたには惜しみなくすべてを捧げたいこの心、そこで布施を覚えました」と。というのは、布施というのを遠いところから見なくて、母が子供を見る時の心と見ることでございませぬ。その母の心というのは本当に菩薩の心に近いものなので、「あなたには惜しみなくすべてを捧げたいこの心、そこで布施を覚えました」と訳させていただきました。

その次、持戒というのがございませぬ。戒律と言うとき何となくぴんとしないんですが、わたくしはその戒律のことを「あなたのお気に召されようと身を繕うこの心、そこで持戒を覚えました」と訳させていただきました。本当はわたくしどもが修行のために国家のために人類のために尽くすその心持ちで眺めるときに「あなたのお気に召されようと、相手のお気に召されようと身を繕うこの

心、そこで持戒を覚えました」といえるでしょう。

その次、忍辱というのがございませぬ。よく不忍の池も東京にはございませぬけれども、なんとしても寛仁な心が紛れてなんとならないようなことがわたくしたちの生活のあいだにはございませぬ。わたくしどもの幼い時お母さまに叱られたりすると、涙をながしながら反抗をしたこともございませぬが、お母さまがすでに亡くなっておられる方たちの気持ちから見ると、あの時のお母さまのお言葉は本当に叱責さえも甘んじて受けられるようなものであらうと思ひます。それで忍辱のことを「あなたからなら叱責さえも甘んじて受けるこの心、そこで忍辱を覚えました」と訳させていただきました。

その次、精進というのがございませぬ。これは「世に人多けれどただ一人あなたのみを慕うこの心、そこで精進を覚えました」と訳させていただきました。本当はわたくしどもいい加減な気持ちで見るとよくわからないんですけども、餓鬼道にも布施をするというような立場の仏様を考えると、世の中には大勢の人がいるけれどもその中であなたのみを慕うその心、そこで精進を覚えましたとも訳することができるような気がしました。ご存知の通り精進は努力することでございます。

その次、禪定というのがございませぬ。インドで仏教が発生してから中国を経て、朝鮮を経て、日本に仏教が伝わりましたけれども、仏教の中で禅仏教・禅ブッディズム(Zen Buddhism)というのがヨーロッパに広まったのは、ご存知の通り日本の仏陀、鈴木大拙という人によってでございます。禪定というのは早い話でいうと禅仏教でございます。わたくしどもは物事を刹那的に解決してしまうというような気持ちもあつたり、ちょっと苦勞を我慢して頑張っていかなければならないのをいい加減にすることもございませぬが、禪定というのは夢に移らずに寝ても覚めても真理そのもの、お釈迦さまの本当の真心の暖かい差し伸べる温心に感謝しているということで、「夢に移らずに寝ても覚めてもあなたのそばを駆けめぐるこの心、そこで禪定を覚えました」と、こういう風に訳させていただきました。

その次が般若でございます。般若というのは智慧のことです。知識屋は実行のない場合がよくありますのであまりいいものではございませぬが、その知識よりも少し一足深く踏み込んだのを智慧と申します。インドの言葉ではブ

ラジュニャーって言うんでございますが、そのプラジュニャーのことを次のように訳させていただきました。「あなたの腕に抱かれて喜びも悲しみもあなたとわたくしとの存在をも忘れ果てた時、そこで般若を覚えました」。

以前、ヨーロッパから来た友だちに「この前に会った時の奥さんと今の奥さんとは違うんですね。どうしたんですか」と聞いたら、「ニューワイフ」といいました。新しい奥さんということです。前の奥さんとはすでに別れているんでございます。多分、いろいろ問題があったんでしょう。

誰の家庭を問わず、結婚生活には非常に辛いこと、苦しいこと、耐えないことがいっぱいあると思います。さらに、初婚された人と子供を持ち、教育をさせ、世が終わるまでの苦労を小説に書いたら何巻書いても足りないだろうと思います。ですから、相手と自分が二人でないという智慧、喜びも悲しみも相手と自分との存在も忘れ果てた時の智慧がないと、その家庭は最終の段階までは行けないのではないかとわたくしは思います。

また大乘仏教、特に菩提の法を称える『南無妙法蓮華經』の神聖なる思想とか宗教的に奥深いお言葉を貸していただきますと、智慧についてこういうこともいえるんじゃないかと思えます。この娑婆を生きているんですけれども、ちょうど鉢に泥が付かないように清浄無垢なる気持ちで娑婆をよく渡っているというところにまた般若波羅蜜っていうのがあるんじゃないかと。

最後に、その六波羅蜜の結論的なものをこういう風に訳させていただきました。「そうです。あなたは菩薩の化身。この身に波羅蜜を教えてくださいと現われてこられた菩薩の化身」。この世に現われてこられて救ってくださった菩薩の化身のことを考えて見ると、誰を見ても、愛している旦那さんから奥さんを見ても奥さんから旦那さんを見ても、本当に菩薩の化身のような気がするのではないのでしょうか。わたくしつくづく考えると、自分の周りの人たちが全部菩薩のようでお釈迦様のような感じがするんでございますが、こういうような気持ちを以て世渡りをしている時に家庭は平和であり、お釈迦様と一緒に生活ができるんじゃないかと思うんでございます。

わたくし日本語があまりうまくないので自分の気持ちを十分ご説明できないのがまことに残念でございます。もうだいふ時間が過ぎ去りましたので、ここで終わらせていただきたいと思います。ありがとうございます。

弔辞

謹んで、大韓伝統仏教研究院院長・文学博士・金知見先生の御霊前に申し上げます。

金知見先生。突然のご訃報に接し、私には言葉もありません。どうしてこれほど早く、あっさりとこの世を後にされたのでしょうか。奥様、お子様方のお悲しみと口惜しさは、察するに余りありますが、私ども東アジア世界の仏教者、仏教研究者、人文科学研究者にとりまして、韓国と日本の間に堅牢な橋を架け、東アジア世界の仏教研究のネットワークを作り上げられた先生を失うことは、まことに痛恨の極みでございます。

思い起こしますと、先生は、1970年頃、駒沢大学での修学を終えて、私どもの東京大学大学院人文科学研究科インド哲学専門課程にお入りになりました。私が先生と親しくご交誼を戴くようになったのは、それからでございます。以来数えれば30年になりますが、一夜の夢のようにも感じます。しかし、そこには楽しく、有り難く思い起こされることどもが沢山詰まっております。なかでも、学生時代、私がお世話になっておりました駒込の梅檀寮に先生がお越しになり、夜遅くまで語り合ったことや、先生がご帰国後、毎年のようにほとんど独力で開かれました国際仏教学術会議にお招き下さった時のことは、今も鮮明に記憶の中から甦ってまいります。ある会議の後、お国の各地をご案内いただいていた折り、突然何か話をするように言われ、四苦八苦しで講演させていただいたことも、今は楽しい思い出の一つでございます。私が韓国の仏教について次第に関心を深め、現在、「東アジア」という枠組みの中